

## 第5分科会【読書活動】

「読書が育む脳  
～なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか～」  
(参加者153人)

講師 さかい くによし 酒井 邦嘉 氏

(東京大学 大学院総合文化研究科 教授)

言語脳科学の研究者で「脳は紙の本で鍛えられる」と提言する酒井邦嘉氏（東京大学 大学院総合文化研究科 教授）に「読書が育む脳～なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか～」をテーマにお話しいただいた。

読書は①言葉の意味を補う「想像力」が身につく。②自分の言葉で「考える力」が身につく。③読んで味わった経験を脳に刻むことができる。これらのことが自然に行われ、脳は成長し、変化し、創られていく。

インターネットが普及し、調べることに追われ考えなくなることは大問題である。本は自分で考えなければならない部分が残されている。「ウェブより本を」と考え直さないと大変な時代になると危惧している。

大学は考える場を提供するところであり、公共図書館の役割は多様な本の世界に誘う貴重な入り口であり、考える場を提供するところでもある。

読書や日常の会話は言語を介して行われるが、いちばん大切なことは目に見えない心である。我々は言語を通して他人の心を知ろうとしている。心を育てることで、脳は育まれる。それには目に見えない部分に対して想像力が必要。あくまでも言語は入り口だということ忘れてはならない。

小学生の「デジタル機器に対する心配」の調査から保護者は目に見えない言語や心に関わる影響をあまり心配していないことが分かった。いずれ子どもの学力や心の発達に影響がじわじわとくる。その事に保護者が気づいていないことは、危機的状況である。心をどう育てるか、言葉は身についているか、どう活用しているか大人が意識を払わなければいけない。

電子書籍と紙の本はそのよさを知り、使い分けが大切だが、文明が進歩しても大切なものは変わらない。自動車があっても自転車はなくならないのと同様、築き上げてきた文化は簡単に凌駕されない。電子書籍と違い、紙の本は大きさ、厚さ、紙の質、そういうことの全てが文化である。視覚だけでなく、匂い、手触り等々、心に残る手がかりがあり、五感に訴える力をもつ「紙の本」。このことだけでも紙の本は、電子化に負けない！

「活字を読むことは、単に視覚的に脳にそれを入力するだけではなく、足りない情報を能動的に想像力で補い、曖昧な部分を解決しながら『自分の言葉』に置き換えるプロセス」であることを、脳のしくみ、脳の働きとともに再認識できたお話だった。



酒井 邦嘉 氏